

男性性研究の動向と展望：社会化からエージェンシーへ

佐々木, 正徳
九州大学大学院博士後期課程3年

<https://doi.org/10.15017/3689>

出版情報：飛梅論集. 5, pp.175-195, 2005-03-18. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

男性性研究の動向と展望

—社会化からエージェンシーへ—

佐々木 正 徳*

I. 韓国における男性性研究の意義

筆者は以前、「『韓国における男性性』研究の意義についての一考察」という小稿で、「男性性」研究の文脈の中で、韓国という地域を研究フィールドとして、実証的な研究を行うことの重要性について考察した¹⁾。そこで指摘した意義とは次の三点である。

一点目は、国際的な議論の場における男性性を巡る諸問題の検討が、これまでは欧米社会・文化についての分析が主流であったという点を鑑み、そうした傾向から脱却して多様な地域の社会・文化を対象とした研究を行うことにより、男性性の諸相の普遍性・可変性・特殊性の議論をよりグローバルな文脈の中で精緻化することが可能になるという点である。こうした作業は同時に当該地域特有の男性問題を抽出することにもつながり、ひいては男性問題の解決へ向けて、より実践的なコミットを行うことを可能にさせると考えられる。

二点目は、韓国社会の男性性およびそれと密接な関係にある男性運動の諸相を明らかにすることにより、これらを日本の男性性や男性運動のそれと比較することが可能となり、両国の男性学・男性運動に関する研究のさらなる発展が期待されるという点である。相対的にみて欧米諸国よりは類似点が多い韓国と日本とを比較することは、有意義であると考えられる。

三点目は、韓国社会論・韓国文化論への貢献である。韓国に根強く保持されているとされる儒教的な思考様式²⁾と密接な関連性がある男性性を研究の対象とすることにより、韓国社会・文化の側面を照射することが可能になると思われる。近年、サッカーワールドカップに代表されるように日韓共催イベントが数多く開催されている。また、「冬のソナタ」から火がついた「韓流」は、今やマスメディアで扱われない日はないほどである。かつて、日本でこれほどまでに韓国への注目が高まったことはないであろう³⁾。これは、両国のこれまでの関係⁴⁾と今後の関係を考えるなら、喜ばしいことである。しかし、人々の耳目が集まれば集まるほど、そこに先入観や偏見による文化摩擦が惹き起こされることもまた事実である。よってこれからは、これまで以上に日本における韓国論の発展が懸案となってこよう。男性性を切り口として韓国社会を読み解こうとする筆者の試みは、異文化としての韓国を理解するための一助となりえると考えている。

先の小稿では上述した意義を明らかにするために、まず男性学誕生の経緯とこれまでの研究過程

*九州大学大学院博士後期課程3年

を概観することで、東アジア地域の男性性に関する諸問題を研究対象とすることの必要性について指摘した。そして、日韓両国の男性運動と男性学の登場背景とこれまでの展開について述べ、両国の男性運動の展開過程に現れた相違を指摘し、それが生起した要因として考えられる仮説を三点提示した。そして、結論部で仮説を実証するために有効と思われる対象と方法を選定し、今後の具体的な調査への方向性を指し示した。そこで指摘した対象とは、1990年代以降韓国で生じてきた男性（父親）運動団体であり、方法とは男性運動団体への参与観察研究と活動参与者へのライフヒストリー調査であった。また、同時に男性性の可変性に関する議論を深めるために、歴史的なアプローチを併用していくことが有効であることを指摘した。

本論は以上の議論を受けて、実際に男性運動団体というフィールドで「男性性」に関する実証的な研究を行おうとするときに有効な分析枠組みを提示し、今後の研究の指針とすることを目的としたものである。ところで、箕浦〔1999〕が述べるように、フィールドワークは「仮説実証的アプローチ」よりは「仮説生成的アプローチ」がより適しているといえよう。しかし、フィールドワークが「仮説生成的」であることは、必ずしも調査前に仮説が存在する余地がないということの意味してはいない⁵⁾。「仮説生成的」であることは、調査前の仮説の有無よりも調査データの分析を通して得られた新たな知見を積極的に活用して、その都度従来の仮説に対して柔軟な修正を加えていくということにその本来の利点がある。同様のことはライフヒストリー調査についても言えることである⁶⁾。よって、これまでの男性性に関する研究を中心に、社会運動団体に関する研究の近年の動向を加味することで、男性性の実証的研究に有効であると思われる分析枠組みを提示し、具体的な調査を進めていくための今後の展望を示すことを試みる。

そのために、本論では以下の構成をとることにする。まず、II章では男性性概念を巡る諸研究の展開を明らかにする。昨今、男性性を巡る研究はジェンダー研究と不可分な領域になっているが、男性性を巡る議論はフェミニズムの勃興以前から既に生じていた。II章では、科学の分野で男性性が注目されはじめた時期まで遡り、男性性という概念の扱われ方の変化を明らかにする。次に、韓国の男性性がどういった語られ方をしてきたかを韓国内の男性学の研究動向を概観することで明らかにする。そして、その上で男性性の諸相の普遍性・可変性・特殊性の議論をよりグローバルな文脈の中で精緻化するという、著者の研究がもつ第一の意義に應えるために有効な男性性概念について考察する。つづくIII章では、II章で得られた男性性概念を具体的なフィールドに応用する際に有効となる視点について考察する。著者が参与観察研究およびライフヒストリー研究の対象として想定しているのは、韓国の男性（父親）運動団体および運動への参与者である。韓国の男性運動団体は社会運動団体としての性質を有していると考えられる。よって、ここでは社会運動研究の領域で多く活用されるようになってきている、社会運動に文化的側面を導入していくという方法にヒントを得つつ、韓国の男性（父親）運動団体および活動参与者を男性性研究の枠組みでどう捉えていくべきかについて検討する。そして、最後のIV章では結論として今後の具体的な調査への展望を記す。

筆者は先に取り上げた小稿での目的を「今後具体的なフィールドを設定し調査を実施していくた

めの、羅針盤としての役割を果たすものになること」⁷⁾に置いていたが、そうした文脈で言うと、本論考は今後具体的な調査を進めていくための海図としての役割を果たすことを目的として書かれたものである。海図は航海を続けるたびに何度も修正され、その精度を高めてきた。本論で示される枠組みが、今後どれだけの修正を加えられるかは未知数であるが、本稿は韓国における男性性をテーマにして実証的研究を行うために、欠かすことのできない必須の作業なのである。

Ⅱ. 男性性をめぐる諸研究

男性性という概念はもともと男女の性差研究の枠組みの中で生まれ、社会化論、ラディカルフェミニズムのインパクトを經由し、社会構築主義を導入して現在に至る。男性性の研究は近年に至るまで女性性の研究とともに、つまり「性差研究」の枠組み内で行われてきた。本章では、男性性および性差を巡る議論の流れを確認した後で、そうした議論の影響を受けた韓国国内での男性性研究がどういった展開を見せているのかについて明らかにする。

1. 生物学的還元論

男女の「性」が研究の枠組みとして意識され始めたのは19世紀後半からである。それまでは男女の性別の違いと行動の差異は自然によって与えられたものであり、男女が自身の性別に即した行動を取ることに疑念を差し挟む余地はなかった。性差がある意味で神性を有していたのである。「男性性」と「女性性」をそうした神性から引き離し、はじめて分析の対象としたのは生物学と心理学である。その中心となったのは生物学の分野ではダーウィンに代表される進化論的生物学であり、心理学の分野ではフロイトに代表される精神分析学であった。

進化論的生物学は、生物が自然淘汰に即した進化メカニズム、すなわち種の保存に適した方法で進化を遂げているという立場を主張することで、無性生殖よりも有性生殖の方が種の保存に適しており、そのため人間には男女という二種類の性別が存在するということを主張した。そうすることで性差を、神的な次元から分析の次元へと置き換えたのである。つまり、「行動の性差に説明を提供するというまさにその企てによって、進化論生物学は性差がそれじたい説明されるべき事柄であり、多少なりとも検討されなければならない現象である、という考え方をうちたてた」¹⁾のである。ただし、進化論的生物学は性差を比較検討の俎上に載せたという意義を持つ一方で、検討から指摘されたことは男性の絶対的優位を主張するものであったということも合わせて指摘しておく必要がある。

一方、精神分析学においてはフロイトとユングの影響を無視することはできない。フロイトは心理を生物学的に説明することを志向し、ユングは男性性と女性性の普遍的原理を追及するために、アニマとアニムスという概念を用いた²⁾。

進化論的生物学と精神分析学の両分野を支えていた理論は、一言で言うと性別対称の理論、すなわち普遍的男に対して普遍的女が存在するという男女の属性類型の概念である³⁾。こうした二元論

的思考はデカルトに象徴されるように西洋哲学において多く見られる認識であるだけでなく、中国の陰陽思想など世界の様々な地域で確認でき、また、科学の分野においても多く見られることから、比較的人類に受け入れやすい思考方式といえそうである。そして、両分野とも差異が生じる根拠を生物学的な性差に求める生物学的還元論の性格を持っていた。性別対象の理論のもっとも典型的なパターンは、男性の持つ攻撃性を男性の身体から分泌される何らかのホルモンの作用によるものと考え、男性の攻撃性を普遍的なものとして捉える方法である。

進化論的生物学と精神分析学は、男性性と女性性という概念、言い換えるなら男らしさと女らしさという言葉で表現される思考様式・行動様式が、与えられた性別とともに自然的にあらかじめ規定されているという認識から脱却し、それらを科学の分析対象にしたという点で意義があった。しかし、性差をすべて生物学的要因に帰結させており、その点で限界を持っていたといえる。例えば、性によって相違が見られる思考や行動の要因をすべて生物学的要因に帰するやり方では、文化ごとに存在する男性性・女性性の多様性を説明できない。また、セクシュアリティの領域からみても同性愛の存在を説明することができない。両者の議論は以上の点で限界をもつものであった。

こうした性の二元論とその根拠を生理的要素に求める生物学的還元論は、人々の耳目を集めやすいが故に、疑似科学の分野ではいまだにそれなりの影響力を有しているが、学問的な分野においては放逐されたように思われる。性の二元論の放逐に大きな影響を与えた出来事として1960年代以降の第二波フェミニズムがあげられる⁴⁾が、そこに至るまでに既にいくつかの兆候があらわれていた。

例えば、生物学的視点を重視する一方でフロイトは、人間の性が単純に二元論的には区分できないことを指摘していた。フロイトは、「性欲論三篇」で、人間の中の「両性性」に注目して次のように述べている。

「心理学的な意味でも生物学的な意味でも、純粹の男性または女性は見出されないということになる。個々の人間はすべてどちらかといえば、自らの生物学的な性特徴と異性の生物学的特徴との混淆をしめして……いるのである」⁵⁾

フロイトのこうした見解は、フェミニズムの興隆以前から性の生得的二元論に関する疑義が提示されていたことを示唆するものである。こうした考えはその後、精神分析が男性性や女性性を社会的な諸過程を通じて形成されていく心理形態とみなす社会化アプローチへと導いた⁶⁾。また、コンネル [1993] はフロイトの功績について以下のように述べる。

「ジェンダー論の領域におけるフロイトの重要性は、通常いわれるほどには性というテーマにかかわっていない。ジェンダー論にたいするフロイトの貢献は、むしろ精神分析という研究方法の提供にあり、これをつうじて情動生活や人間発達にかんする大量の新しい情報をみちびきだしたこと、さらにライフヒストリーそれじたいが解明を要する分析の単位であることを焦点化した点、にある」⁷⁾

フロイトの性の不確定性という要素への言及は、直接的ではないにしても、その後の男性性・女性性の研究に影響を与えたと言うことができよう。

2. 性役割論と社会化論

1930年代以降、男性性と女性性を巡る議論は「社会的役割」という概念を導入して展開していくことになる。すなわち「性役割論」の登場である。この理論は性役割を機能主義的な観点から捉え、当該社会に規格化された「性役割」概念を導出するというものである。この理論の導入によって、規定の性役割から外れる存在は説明不可能な存在から逸脱者とみなされるようになり、そうした存在への介入と矯正が正当化されることとなった。また、性役割論は女性と男性の行動の違いを社会的期待の違いによるものと規定するため、性差の生物学的決定論を否定するのに有効な理論となった。また、性役割が社会の要請に基づくものであるとするなら、社会の要請に変更を加えることで新しい性役割が創出されると考えることもできる。こうした変革可能性が当時のリベラルフェミニストによって積極的に強調されたことも性役割論の特徴として指摘できる。

一方同時期に、マリノフスキーやミードによって、所謂「未開社会」の文化を明らかにする文化人類学的研究が発表された。ミードはその著書『三つの未開社会における性と気質』においてジェンダー概念を導入し、生物学的な概念であるセックス (sex) と社会的産物であるジェンダー (gender) とを区別した⁸⁾。こうした人類学の知見によって、文化によって性別を捉える視角が多様であることが明らかにされ、性役割が単純に人類普遍に性別によって生得的に規定されているとはいえないという点が強調されたのである。

1950年代に人類学、理論社会学、実存現象学の領域からそれぞれ性役割に関する著作が著されたことを契機として、性役割を巡るいくつかの議論が一つの枠組みへ収斂する。その著作とは、ミードの『男性と女性』、パーソンズの『家族』、ポーヴォワールの『第二の性』である。これらは「ともに精神分析的な観点からパーソナリティをとらえており、……この観点を……主として性役割およびジェンダー役割としてとらえられた分業の分析に統合する試み」⁹⁾がなされている。したがってこれ以降、性役割と近代家族（核家族）は同時に検討されるテーマとなり、近代家族の維持と機能的な家族のあり方の追及という文脈で性役割研究が行われていくことになる。これはまた、性役割研究が女性＝妻および母親役割の研究へと転換していったことを意味している。なぜなら、核家族は男＝外（社会）、女＝内（家庭）での役割観を前提とするものだからである。

以上の議論の展開を受けて登場した社会化論は社会構築主義がジェンダー研究を捉えなおす最近に至るまで、性役割の社会的分析の分野においてそれなりの影響力を有してきた。社会化論は性の枠組みが生物学的な性であるセックスと社会文化的な性であるジェンダーの二種類あるということをも前提にして、生物学的な性をもって生まれてくる人間が成長の各段階で徐々に社会文化的性であるジェンダーを内面化していくという考え方である。性役割論と社会化論との間には一見してわかるように親和性が高い。よって、両者が抱える問題点も大枠では共通する。それは、ジェンダーの視角から見ると、セックスの存在を自明視しているために、そこに収まることのできない逸脱者

の存在を説明できないという点であり、社会分析の正当性の面から見ると、それが個別的な社会過程にたいする純粋な社会分析とはなりえていないという点である。以下、両者の議論について少し詳しく検討してみることにする。

性役割論は、子どもの性別に応じて期待される何らかの役割がその社会に明確に存在することを前提としている。換言するならば、男子に対してはその社会が理想とする「男らしさ」の獲得が期待され、女子に対しては同様に「女らしさ」の獲得が期待されるということである。ところで、性役割論は特定の様式を子どもに内面化させようとする存在が、その社会で双方の性に要求される「らしさ」を完璧に理解し、子どもに内面化をはたらきかけることができるということが前提とされている。しかし、そうした前提の真偽を証明することは事実上不可能である。その根拠を上位世代から内面化された結果に求めるのであれば、上位世代に「らしさ」を内面化させた存在がいなければならず、そうするとその存在の内面化過程が再び疑われることになる。つまり、「らしさ」の根源を辿ろうとすると、その起源を求めて永遠に遡り続けるしかなくなるのである。結局、役割期待理論では、社会が特定の「男らしさ」や「女らしさ」を内面化させようとはたらきかけるメカニズムを説明することができないのである。よって、本来長所であったはずの社会変革の可能性も事実上捨象されることとなる。

社会化論の問題点は、これを更に現実の場で生じている事象からとらえたものである。社会化論は子どもに社会化を行う媒体として、家族・学校・仲間集団・マスメディアなど様々な制度や機関を想定する。しかしそうした機関が統一された共通の目標の下で相互に協力しながら子どもの社会化に寄与しているかという点、答えは否である。家庭と学校との軋轢や、仲間集団との葛藤が日常茶飯事であることが過去の多くの研究で明らかにされており¹⁰⁾、こうした問題が現代に固有のものではないことがわかる。こうした葛藤の存在に自覚的になるならば、子どものジェンダー形成において、特定の限られた価値観が社会化の効果によって内面化されるとは俄かに考えづらくなる。また、社会化理論は社会化される側の主体性を捨象している。家庭や学校といった社会化機関が子どもに与える影響は決して少なくはないであろうが、しかし、そうした中でも子どもはそれを従属的に受け容れるだけでなく、自分なりの解釈過程を経て受容していると考えることができよう。逸脱はそうした文脈によって理解することができる。結局、社会化理論は伝達の機械性と結果の調和性を想定しており、そこから「らしさ」変革の可能性や社会内部に存在する個々人の思考の複数性を見出すことはできないのである。

性役割論と社会化論は、ある社会に存在する理想の「らしさ」の発生要因として生物学的基盤を採用せざるを得なかったために、ジェンダーがセックスによって規定されてしまい、構造の不変性を強調してしまった。つまり、社会における男性優位の構造に正当性を付与してしまったのである。こうした、男性優位のパラダイムに大きな疑義を突きつけたのが、第二波フェミニズムのインパクトであった。

3. 男性性研究における第二波フェミニズムの影響

1960年代までの性に関する諸研究により、男性性というものが相当程度文化によって違いがあることが明らかにされてきた。しかし、当時語られていた男性性の多様性とは、根本的なところで生得的な要素に還元される範囲での相違であったことは前節までで確認したとおりである。1960年代後半から生じたフェミニズムの第二波は、そうした認識を更に一步進めて、男性性をめぐる議論に新たな展開をもたらすことになる。

フェミニズムの第二波は性の二分法を徹底的に批判し、「個人的なこと」を政治の場にもちこみ、女性の抑圧性を訴えることで、それまで男性中心的パラダイムで流れていた諸研究に再検討を促した。再検討は文学・社会学・文化人類学など数多くの学問領域におよび、この過程において、科学として客観的な根拠をもつと考えられていたものが、いかに男性中心の視点で女性の存在を無視・理想化したままで発展してきたのかが明らかにされた。こうした再検討はこれまでのジェンダー認識にも向けられ、結果、セックスとジェンダーは明確に分離され、ジェンダーはあくまで社会化作用によって形成されていくものとされた。しかし、ジェンダーがセックスによって規定されないことは示されたものの、代わりに男性と女性というセックスにもとづく個別的な概念が大多数の社会に存在¹¹⁾し、そしてそれが多くの場合男性優位に機能しているということが明らかになってきた。そこで、こうした構造が維持されている原因に焦点が当てられることになる。男性優位の普遍性に対するラディカルフェミニストからの回答はミレットが『性の政治学』[1985(1970)]で規定した家父長制であり、生物心理学的還元論者からの回答は生物進化の論理とフロイトに範を置く伝統的な精神分析の論理であった。

家父長制とは「社会制度、政治制度および経済制度を通じて女性を抑圧する男性の権威システム」であり「家庭の内部および外部の権威構造から生じる資源と報酬を、男性がより多く利用したりその利用を媒介する権力のこと」¹²⁾であり、ラディカルフェミニストが男性優位の権力関係を言い表すために使用し、その打倒を呼びかけたものである。『性の政治学』は、男女間の関係の権力関係を明らかにし、そうした男性優位が本質的なものではなく、社会的につくられたものであることを文学作品の分析を通して主張した。

生物心理学的還元論には二種類の系統がある。一つは生物進化論的な考え方で、すなわち男性による支配を男性の遺伝的攻撃性に求めるものである。もう一つは、精神分析による理論、すなわちエディプスコンプレックスによる去勢不安からの防衛である。

しかし、これらの説明はいずれも限界を有している。家父長制概念は産業革命後の西洋世界を説明するためには有効であるかもしれないが、すべての社会に適応することはできない。換言するなら「男性性というものがテストされる社会を説明することはできるが、性が相対的に平等である社会を説明することはできない」¹³⁾のである。また、生物進化論的な考え方が根拠薄弱であることはこれまでの研究が再三に渡って指摘してきたことである。精神分析の理論も、個人世界の拡大したものが公的な文化であるという解釈を導くことになるため、通過儀礼などを通して社会が強制的に男性性を付与しようとする社会を説明するには不適切である。以上の限界を克服するために、こ

の後、人類学的研究蓄積の再検討と、社会構築主義の導入が進められていくことになる。

第二波フェミニズムが男性性研究について与えた影響は他にもある。それは、この時期、女性運動の影響を受けて男性運動が誕生し、運動を通して明らかになってきた男性問題や男性性を学問的な見地から検討しようという動きが生じ、男性学という学問分野が誕生したことである。男性運動の興隆および男性学の誕生により、それまで単独では検討されることのなかった「男性性」が注目されるようになる。そして以後、男性性をテーマとして扱った研究が徐々に蓄積されていくことになるのである。

4. 男性性研究の新展開

ギルモア [1994] は、ポストフロイト派の理論を利用することによって男性性研究に新たな地平を開いた。ポストフロイト派は、少年の成長への一番の恐怖を去勢不安ではなく、母親に対して抱く空想と恐れという両義的な感情に求める。少年は幼き日に得られた母親との一体感から来る幸せな体験を空想の内にも有している。しかし、その空想に負けて幼児へ戻ることは「退行」であり避けられねばならない。この文脈において男性性とは「内なる永遠の子供に対抗する防衛策として、また子供っぽい言行に対抗する防衛策として、さらにはピーターパン・コンプレックスに対抗する防衛策として、解釈することができる」¹⁴⁾。ギルモアの議論は世界各地の様々な民族誌の分析から、「男の役割」と「男性性のイデオロギー」が直接関連していないことを明らかにした。このことは「男性性」が象徴的表象であり、文化的構築物であり、無限に変化するもので、常に必要なものとは限らないということを立証したという点で非常に意義深いものである。しかし、一方でギルモアは現代資本主義社会に見られるジェンダー構造の変革可能性については明言を避けており¹⁵⁾、また、ポストフロイト派は母子退行への空想の根拠を養育者である母親との関係性に求めており、それを全世界の社会へ普遍的に適用することには疑問が残る¹⁶⁾。また、参照するフィールドの事例も、自身によるフィールドワークではなく他の研究者が行ったものに限られており、論証に用いた調査の信憑性についての議論はなされていない。以上の限界を持ってはいるものの、男性性を通文化的な視点から照射したというその営みにおいて、ギルモアの研究が男性性研究に果たした貢献は大きいといえよう。

ギルモアとは異なり、より実践的な立場から研究を行っているのがコンネルである。コンネルはその一連の著作 [1993, 1995, 2000] の中で、ジェンダー秩序の理論をうちたて、ジェンダーの構築性について述べることで、平等社会実現への途を模索している。また、近年は男性性とグローバルゼーションに関する議論のために世界各地の男性性の事例収集を積極的に行っている¹⁷⁾。コンネルは、これまでの男性性をめぐる議論において、男性性の概念化が必ずしも充分に行われなかったか意図的に避けられる傾向があったとして、男性性 (masculinities) の概念化を行う。それは主として次の特徴をもつ¹⁸⁾。

- ・構築されるもの
- ・構築されるものであるがゆえに、文脈によって可変的
- ・ある社会、文化において支配的な男性性（＝ヘゲモニックな男性性）と、従属的な男性性が共犯関係として存在
- ・一個人の男性性は社会関係との活発なネゴシエーションによる成長と発達複雑なプロセスを通して生産
- ・個人の中にヘゲモニックな男性性と従属的な男性性が共存する場合も多い

コンネルはグラムシの理論に依拠して男性性の概念化を行う。グラムシはレーニンとクローチェのヘゲモニー概念に刺激を受けながらも、自身独特のヘゲモニー概念を構築する。グラムシのヘゲモニー概念は天童〔2001〕が簡潔にまとめている。それによると、「『市民社会』における人々の『自発的』合意（‘spontaneous’ consent）を組織化するための文化的・道徳的指導権と支配力」¹⁹⁾を意味すると定義されている。

さて、ここまで検討してきたことから、男性性の研究について次の二点を指摘することができる。一点目は、男性運動の誕生以前は女性性が単独の研究として扱われることはあっても、男性性が単独の研究テーマとして検討されることはほとんどなかったということである。第二波フェミニズムのインパクトが男性運動を生み、そこから男性性の多様性が意識され研究が開始されたという意味で、第二波フェミニズムが男性性研究に与えた貢献は大きいといえよう。

二点目は、男性性研究においてその内容について検討されることはあってもその性質が問われることはこれまでほとんどなかったという点である。第二波フェミニズム以前の男性性研究において分析の対象であったのは男性性そのものではなくて、それが生じる原因であった。こうした研究においては男性性の内容として、「攻撃性」や「力強さ」といった要素が無前提に適用されていた。また、ラディカルフェミニズムが問題にしたのも家父長制の構造と起源であり、その構造において優位な位置を占めているとされる男性の性質については一元的に解釈される傾向があった。すなわち、男性というセックスをもつ存在のすべてが悪であるとみなす風潮も少なからず存在していたということである。こうした点が少なからず、男性側のフェミニズム嫌悪の要因となっていたことは想像に難くない。

こうした傾向は、1980年代に入って社会科学の研究領域において社会構築主義が導入されてからも基本的には変わらなかった。「男性性」は研究者各自の問題意識によって独自の意味で用いられるか、あるいは意図的に概念化が避けられる傾向にあったのである²⁰⁾。しかし、男性問題だけでなくジェンダー問題を扱う際にも、今後男性性の概念化は避けて通れない問題である。なぜなら、男性性の複雑性こそが、家父長制や男性支配、あるいは男性問題を引き起こす一要因となっていると考えられるからである。男性性の形成過程だけではなく、内容の分析まで行うことがこれからの男性性研究に要求されている点であるといえよう。

コンネルは、男性性を構築物として捉えることによって、生物学的性差を重視する立場からは先

天的なものとしてみなされ、変更不可能と考えられている男性性を変革していく可能性を端的に示した。そして、ヘゲモニー概念を導入することによって「男性性」の複数性と複雑性を描き出す。こうした過程を通して、コンネルはヘゲモニーを有していない他者に対して抑圧的に働く男性性（暴力志向など）の改変を志向していくための道筋を示したのである。

5. 韓国における男性性研究

韓国において男性運動が生じてきたのは1990年代に入ってからである²¹⁾。男性学もそれと歩調をあわせるように、徐々に研究蓄積を増やしてきてはいるものの、男性学が生起している諸外国に比べて豊富であるとは言いがたい。ここでは、男性性を扱った著作の中でエッセイなどを除いた研究書を紹介し、韓国の男性性研究のレビューを行うことにする。

韓国男性学のパイオニアである鄭萊基はFranklin II [1996]、伊藤 [1997] を翻訳している。これらはいずれも概説書であり、男性学の基本的な理論枠組みの紹介のほか、前者はアメリカ合衆国、後者は日本の状況が主に述べられている。よって、韓国についての言及はない。

女性韓国社会研究会編 [1997] は、女性のジェンダー研究者によって現代の韓国男性の姿を描き出すことを目的として書かれたものである。「家族」「組織」「社会」の三部構成をとっており、内容も多岐に渡っているが、基本的には男性性の社会化過程が語られる。その上で、平等な男女関係の構築のために男女ともにジェンダー問題に対して意識を向上させていくことの必要性が訴えられる。男性も家父長制の被害者であるとしてジェンダー問題を語る語り口は男性学の影響を受けたものであるといえよう。また、こうした切り口はフェミニズムやジェンダーに関する研究や議論がとく女性のものに限定されていると思われがちな状況の中で、男性にもジェンダー問題に目を向けさせる契機となることが期待できるものである。

しかし、本書では男性の大学教授・医者や軍人をインフォーマントとした実証的な研究もいくつか見られるものの、その分析枠組みを男性がいかにして家父長的な男性性をもつ存在として社会化されていくかという点においているため、結果として男性と男性性に存在する多様性を捨象することになってしまった。また、本稿の2節で述べたように社会化論では社会変化を説明できないため、男女不平等問題の解決策として男性の主体的な意識変革を挙げるに留まっている。本書は社会化論に立脚したために、男女不平等問題の解決へ向けた実効性のある指針を示すことはできなかったものの、ジェンダーに関する問題が女性だけでなく男性にも関わるものであることを強調したという点で、意義深いものであったと言えるであろう。

ソン他 [2000] も、男性もジェンダー問題の主体であることを訴えるために男性の被害者としての側面を主張したという点で、女性韓国社会研究会編 [1997] と基本的な立場を同じくしている。ソンミョンヒは、巻頭言でフェミニストの役割を以下のように述べている。

「今度は男性が変化する番である。したがって、フェミニストたちは男性を加害者として攻撃して苦境に陥れるのではなく、彼らも女性たちと同様に被害者であるという同伴者意識を

共有して男性たちを抱きしめなければならない。そして、変化しなければならない男性たちのために、ともに苦しみ、ともに新たな道を探しに出なければならない。これが、フェミニストが男性について語らなければならない理由である。」²²⁾

本書に掲載されている9編の論文の内、6編が社会変化と男性性の関係について述べたものである²³⁾。これらの論文では、社会の変化にともない男性に期待されるイメージが変化しつつあるのにもかかわらず、男性自身の意識が変わっていないということが指摘され、それが現代社会に生きる男性の苦しみにつながっているという論が展開される。つまり、男性の意識変革＝苦痛からの解放という図式を示すことによって、ジェンダー問題に対する男性側の意識向上を企図していると考えられる。以上の論点は、ジェンダー問題の一方の当事者である男性を、問題解決のためにともに活動していく存在であるとした点では、男性を無条件に敵として排除したラディカルフェミニズムの限界を超えるものである。しかし、世の中に存在する男性をすべて「苦痛に苛まれている存在」として一面的に規定しているという点で、男性と男性性の多様性を捨象してしまっている。その意味で、本書でなされる議論は自身の男性としてのアイデンティティに不安を抱えている存在や、社会から抑圧されている男性には何らかの影響力があるかもしれないが、そうではない大部分の男性——苦痛に苛まれておらず、支配的ヘゲモニーを有する男性——の意識をジェンダー問題に向けさせることは困難であると思われる。また、後にも述べるが男性を社会から抑圧されている存在として一面的に規定することは、その社会において支配的ヘゲモニーを有する男性によって、自身の権益を保護する言説として利用される可能性もある。本書は社会変化を出発点として男性性の変化の可能性と必要性を訴えたという点で画期的なものであったが、社会に存在する男性の苦痛を画一的に捉えてしまったために、当事者感覚を有しない大部分の男性に対してインパクトの弱いものとなってしまったのである。

一方で本書は分析の素材として、マスメディアや詩などを積極的に利用している。カルチュラル・スタディーズの認知度の拡大に伴って、こうした分析視角は今後の男性性研究で積極的に用いられるようになることが予想される。

曹他 [2000] は、管見の限り国内の研究者が中心となって書かれた著作の中で始めて「男性学」という言葉が用いられたものである。また、女性韓国社会研究会編 [1997]、ソン他 [2000] に掲載された論文がほとんど女性の手によるものであるのにたいして、本書は男性が中心となって執筆されている。そうした意味でも本書は韓国で始めて書かれた本格的男性学の研究書であるといえよう。全部で500頁を超える本書は、全8章の論文と国内外の男性運動団体の目録からなる。論文は男性学に関する理論的な部分と国外の男性運動の紹介、また国内の男性問題に関する論及によって構成される。本著でも前提となっているのは家父長制社会における男性の被害者性であり、そうした社会から脱却していくために男女がともに協力していくことの必要性が語られる。

ここで、本書第2章に掲載されている鄭菜基の論文から、韓国の男性学について定義した部分を紹介することにしよう。鄭はこの直前までの部分で諸外国の男性学の変遷を明らかにしており、こ

れはそれを踏まえたいえでの定義である。

「既存の、性的イデオロギー (sexism) として形成された誤った男性らしさ (男性性) に対するいくつかの問題・内容を、(主に) 男性の立場から論議することで、男性の正しいジェンダーアイデンティティ (identity) と性役割などを通して、男性としてのみならず人間として誠実で幸福な生を営もうとする、男性の自己救済・救済的学問分野・接近 (自分の過ちは自分で解決しなければならないという原則ならびに女性学との相乗効果の原理)」²⁴⁾ (() 内は全て原文による)

この定義から、韓国の男性学の特徴として、これまでの男性らしさ (男性性) は性的イデオロギーによって誤って形成されてきたとみなすこと、正しいジェンダーアイデンティティと性役割を見出して人間として幸福な生を営むことを目指すこと、あくまでも男性の自己救済的・救済的学問分野であるが女性学との相乗効果も志向していること、の三点を指摘することができよう。つまり韓国の男性学は、その当初から男性らしさの再検討と女性学との協調を志向していたのである。

さて、以上のように女性学との親和性を前提として展開している男性学であるが、視点を「男性性」に絞った場合、その概念については欧米の研究と同様に曖昧なまま分析を行う傾向がある。つまり、「男性性」として規定しうる確固とした何ものかが存在することを前提とした上で議論が進むものの、その確固とした何ものかの実体についての説明や定義、論議はないということである。例えば、曹廷文はソン他 [2000] の2・3章に載せた論文で、男性学の研究の観点および領域、そして性意識について述べているが、アメリカで発生した男性学の一般的な研究方法と研究領域を紹介しているだけで、それをを用いた国内研究の実例や可能性に関する論及はない²⁵⁾。また資本主義社会という共通性はあるにしても、男女の性差を巡る欧米での議論をそのまま韓国社会も同一であるかのように扱って紹介することには問題があろう。女性韓国社会研究会編 [1997] の巻頭を飾る李ヒョジェ [1997] による論文は、比較的丁寧にこの問題を扱っているが、その議論は基本的に資本主義社会成立以後の社会に限定されており、またどちらかというとな男性性の可変性というよりはその強固な固定性が繰り返し指摘されている。すなわち、男性性は固定的であるために変革が難しいが、将来の男女平等社会の実現のために、男性自身が意識を改めて変革していかなければならないとする論調である。李自身は明確に男性性が変化するという立場に立っているが、李のこうした論展開はともすれば恣意的に読み替えられて性役割固定派の論拠に使われる恐れもある。また、ここで言及した三つの論文集はいずれも、男性および男性性の多様性を捨象している。ジェンダー問題の解決に際して、男性の側の多様性を認識することの必要性はこれまでも述べてきた通りである。

以上のことから、韓国の男性性研究の分野において男性性の多様性を照射することのできる、新たな実証的な試みが必要とされているということができよう。筆者の研究はそうした必要性に合致するものである。また、筆者は概念枠組みとしてコンネルの男性性概念を採用することで、この研

究をより効果的に行うことができると考えている。なぜなら、コンネルの男性性概念は男性性の可変性と多様性を前提としており、男性性の安易なステレオタイプ化や本質化を避けるのに最も適した方法であると思われるからである。また、コンネルの概念は支配的なヘゲモニーと被支配的なヘゲモニーを想定するために権力構造が維持される仕組み自体を照射し得る。このことから、ジェンダー問題に関するより実践的な変革の方策を導出することができると考えられるからでもある。さて、そこで次に検討が必要となるのが実際にフィールドワークを行う際の分析枠組みである。次章ではこの問題について検討することにする。

Ⅲ. 男性運動と運動参加者を捉える視角

Ⅱ章の5節で明らかになったように、韓国の研究者による韓国内の男性性の実証的な研究は絶対に不足している状況である。また、数少ない実証的な研究も男性性の多様性を考慮していないという点で不十分な分析にとどまっている。更に、男性性表出の典型的な場であると考えられる男性運動団体を研究対象としたものは管見の限り存在しない。本章では男性性表出の場であると考えられる男性運動団体のフィールドワーク、および活動参加者へのライフヒストリー調査を行う際に、どういった分析枠組みで対象を捉えることが有効であるかについて検討する。結論からいうと、それは男性運動団体を文化としての社会運動の枠組みで捉えることと、運動参加者をエージェンシーとして捉えることである。

1. 文化としての社会運動

「男性性」抽出の試みにおいて男性運動団体を選択する積極的な意味は、1990年代以降、社会運動を文化的側面から扱う研究が増加していることと関係している。きっかけとなったのは「新しい社会運動 (New Social Movements)」論と「フレーム分析 (frame analysis)」の登場である。以下、その意義とインパクトについて紹介する。

「新しい社会運動」論が画期的だったことは運動研究に「集合的アイデンティティ」の概念を導入したことと、運動を構造ではなくプロセスとして捉えることを主張した点である。前者は集合的アイデンティティの形成そのものを社会運動の主たる達成物だとすることで運動の成功概念を変更させただけでなく、研究者による運動観をアイデンティティを重視するものへと転換させた。また、後者はその後展開する運動の文化的研究の先駆けとなった。「新しい社会運動」論は運動研究者の眼を「外から内へ、客体から主体へ、モノから意味へ」¹⁾ 転換させる大きなきっかけを提供したのである。

一方「フレーム分析」は、社会運動において潜在的な参加者や一般聴衆の動員を可能にする原因について説明するために提示されたものである。フレームという概念は、「われわれ意識」(=集合的アイデンティティ) とともにエージェンシー感覚も含んだ行為志向の強い概念である。野宮 [2002] は「フレーム分析」の意義を次のように指摘している。少し長いが引用しておこう。

「『フレーム分析』は……運動組織やリーダーの投企する解釈枠組と潜在的な参加者の理解との結びつき (alignment) という認知的な側面に焦点をあてることにより……それまで動員の対象として暗黙の前提とされていた数として数えられる個人から意識し意味付与をおこなう個人へと研究者の意識を転換させる働きをもっていた。」²⁾

社会運動の文化的研究は、社会運動とその参加者を「多様な意味世界を多層的にかかえもつこと」、「支配の根拠であると同時に反支配的思惟の根源をも内包すること」、「新しい意味世界の創造をにない変動を進めるエージェンシー (行為体) であること」という三点の特徴をもつものとして抽出した³⁾。筆者も基本的に韓国の男性運動団体をこうした特徴を持つ団体としてとらえることにしたい。従来の社会運動分析の視角、つまり構造的な視角や政府の政策変更をともなって初めて運動の成功とする成功概念などをもって、韓国の父親運動団体を見るのであれば、彼らの活動に積極的な意義を見出すことは難しい。しかし、文化的研究の側面から見ると、それは大きな可能性を持った団体に一変する⁴⁾。また、この三つの特徴を前章で指摘した男性性概念に照らし合わせることで、ヘゲモニックな男性性を変革させていく可能性までも予感させる。よって、こうした特徴をもつものとして、父親運動団体および活動参加者に接していこうと考えている⁵⁾。

2. パフォーマティブな主体としての運動参加者

前節で指摘したように、社会運動への参加者は「多様な意味世界を多層的にかかえ」もっており、「支配の根拠であると同時に反支配的思惟の根源をも内包」しており、「新しい意味世界の創造をにない変動を進めるエージェンシー (行為体)」という存在である。

エージェンシー (行為体) 概念は、構築主義の導入以降、ジェンダー研究の文脈で特に重要な意味を持つようになった概念である。これは自律的で絶対的な主体概念、あるいはアルチュセールが想定したような、呼びかける主体 (「大文字の主体」) に対して従属する主体という概念への批判として想起されたといえよう。すなわち、近代哲学の前提であった主体への絶対的な信頼を疑い、更にアルチュセールの従属する主体概念からは抜け落ちていた、権力への抵抗を志向し行為によって社会を攪乱していく存在を意味するために創出された概念が、エージェンシーである。

男性運動団体参加者は、社会運動へ参加している主体という意味で、決して受動的な存在ではない。かといって、権力の行使を行いうる強者でもない。そこで、運動参加者をエージェンシーとして捉えることで、男性性について有益な示唆が得られると考えられる。なぜなら、男性運動の場においてエージェンシーによって意味の維持・攪乱が行われる中心概念の一つが男性性であると考えられるからである。言い換えれば、男性運動が展開する場は、エージェンシーによって男性性の構築性が顕著に暴かれる場であるということである。また、エージェンシー概念の導入は、「男性性」を内面化する側の主体性を照射することができないという、社会化論が陥った限界を乗り越えることができる。

以上のことから、ジェンダー研究および男性性研究の分野において、主体をエージェンシーと

みなす方法は非常に有効であると考えられるのである。

Ⅳ. まとめと今後への展望 ～社会化からエージェンシーへ～

これまでの議論をまとめよう。筆者は韓国において男性性の動態を明らかにすることを研究の目的としている。本論の最初で触れた2004年の小稿では、研究の意義と男性性観察の効果的なフィールドとして、男性（父親）運動団体での参与観察と活動参与者へのライフヒストリー調査、そしてそうした調査とともに歴史的な視角を導入していくことの必要性を指摘した。それを受けた本論では、実際に参与観察研究を行っていくうえで効果的な方法論の検討を行うべく、男性性を巡る過去の研究を検討した。その結果、ヘゲモニックな男性性の変更可能性を志向していくために、コンネルによる男性性の概念を有効な分析概念として採用することとした。もう一つ検討の必要があったのは、分析枠組みである。筆者は社会運動を捉える視角が大きく変容してきていることに着目し、男性運動団体を文化的な側面から検討することが、男性運動団体の活動から「男性性」の動態を明らかにするという意味において、有効であろうと考えた。運動参与者をエージェンシーとして捉える視角を採用するのも、同様の理由からである。最後に今後の研究への展望を記して本論の結語としたい。

筆者は2003年9月から、韓国のある父親運動団体で参与観察研究を行っている。団体は小規模ではあるが、熱心な会員によって良い父親になるべく様々な活動が行われている。団体の会員は「良い父親になる」という点と「社会に存在する性に関する不平等を改善していく」という点では一致しているが、具体的なビジョンや活動への積極度、理想とする今後の団体の方向性については温度差が顕著に見られる。また、ジェンダー問題についての知識も差が大きい。しかし、こうした一枚岩ではない団体が社会変革への可能性を持つことは皿章で述べたとおりである。調査を通して見えてきたものは、参与者は社会変革を行うことを志向して活動を行っているというよりは、自身が良い父親として成長することを第一義におき、社会変革はその延長線上にあるという意識である。こうした「個人的」なことから出発することが、まさにジェンダー問題の解決については有効なのではなかろうか。今のところ、本論で指摘した理論枠組みは男性運動団体と活動参与者のこうした性質・意識を照射する際に非常に適しているようである。「海図」は今のところ、正しく地形を記しているようである。しかし、フィールドワークは常に動的な営みである。今後もより有効なアプローチの存在の可能性を常に意識しながら、フィールドワークおよびデータの分析を進めていくことにしたい。

〈注〉

I 章

- (1) 佐々木 [2004b]
- (2) 韓国文化と儒教との相関性、あるいは韓国社会における儒教の位置づけについては、韓国のみならず日本の研究者によっても数多く言及されている。例えば、古田・小倉 [2002]、伊藤 亜人 [1997a, 1997b]、杉山・桜井 [1990] などである。
- (3) こうした「韓流」の起爆剤となったのが「冬のソナタ」であることは言うまでもないが、それまでも日韓両国の少なからぬ人々が両国の人的交流の発展に尽力してきた。そうした人びとの日の当らない地道な努力によって現在があるということも忘れてはならないであろう。
- (4) 隣国への注目度という点で過去の日韓関係を見るなら、韓国人が日本に注目していた程には日本人は韓国に注目してこなかった。すなわち大多数の日本人にとって韓国は「よくわからない」「興味がない」、または、軍政期の記憶から「暗い」国であった。また、そうしたイメージに植民地支配という史実が重なって、韓国人の大部分は日本のことを怨嗟の目で見ているだろうというイメージが、日本人の中に存在していたことが指摘されている。以上の点については、鄭大均 [1995, 1998]などを参照のこと。
- (5) そもそも、何の仮説も持たずにある事象について調査することが可能であろうか。
- (6) フィールドワークの持つ性質については、箕浦 [1999]の他に、佐藤 [1992, 2002]が参考になる。ライフヒストリーについては、谷 [1996]、中野・桜井 [1995]を参照のこと。
- (7) 佐々木前掲書：273頁

II 章

- (1) コンネル [1993：68頁]。傍点は原文ママ。
- (2) ユング [1970]
- (3) ギルモア [1994：25頁]
- (4) これについては3節で詳しく述べる。
- (5) フロイト [1969：75-76頁]
- (6) もっともこれは、フロイトの意図とは反する方向で展開していったようである（コンネル前掲書：69頁）。
- (7) コンネル前掲書：69頁
- (8) ハム [1999：122-123頁]
- (9) コンネル前掲書：73-75頁
- (10) コンネル前掲書：277頁
- (11) いわゆる「第三の性」を有する社会も、各性別に何らかの個別概念を与えているという意味では同様である。

- (12) ハム前掲書：230頁
- (13) ギルモア前掲書：28頁
- (14) ギルモア前掲書：35頁。なお、この部分はHallman, Ralph. 1969. The archetypes in Peter Pan. *Journal of Analytic Psychology* 14:65-73からの引用。
- (15) これはおそらくギルモアがジェンダー研究を専門としていないことが関係していよう。
- (16) 育児慣行の多様性については、波平・青木 [2002]、原 [1979] を参照。
- (17) この成果の一つとしてM. Kimmel, J. Hearn and R. W. Connell (eds.) [2004] がある。
- (18) Connell [2000：29-32頁]
- (19) 天童 [2001：114頁]
- (20) Connell 前掲書：16頁
- (21) 韓国における男性学の誕生と現在に至るまでの経緯については、佐々木 [2003, 2004b] を参照。
- (22) ソン他 [2000：2頁]
- (23) 残り三編は、男性学の簡単な系譜について述べたもの、演劇の脚本に見られるジェンダーに注目したもの、聖書の創世記に描かれているアダムとイブの誕生神話を男女平等の観点から解釈したものである。
- (24) 鄭菜基 [2000b：169頁]
- (25) 曹 [2000b, 2000c]

Ⅲ章

- (1) 野宮 [2002：6頁]
- (2) 野宮前掲書：7・8頁
- (3) 野宮前掲書：13-20頁
- (4) これは筆者のこれまでの調査結果から言えることである。例えば運動参加者は団体の活動に対して各々主体的な目的意識を持ちながら参加していた。また、現在は団体の認知度を社会的に広げていくことにはそれほど積極的ではない（かと言って消極的なわけでもない）ことから、彼らが社会運動の文化的研究が明らかにした上述の三点の特徴を持つとみなすことが可能であると考えている。
- (5) 現時点（2004年11月）で筆者は既にフィールドワークを継続中である。よってこの文章は本来は「…父親運動団体および活動参加者に接している」とするのが正確であろう。

〈参考文献〉 *は韓国語文献

- 綾部恒雄編 2003『文化人類学のフロンティア』、ミネルヴァ書房
バトラー, ジュディス (竹村和子訳) 1999 (1990)『ジェンダー・トラブル』、青土社
2004 (1997)『触発する言葉』、岩波書店
- * 曹廷文 2000a「男性学のいくつかの研究の観点および研究の領域」『男性学と男性運動』
(曹廷文他) 15-61頁、同門社
2000b「男性学の研究観点および領域」『フェミニスト、男性を語る』
(ソンミョンヒ他) 41-85頁、青い思想
2000c「男が語る男性の性」『フェミニスト、男性を語る』
(ソンミョンヒ他) 87-103頁、青い思想
- * —— 他 2000『男性学と男性運動』、同門社
趙恵貞 (春木育美訳) 2002 (1988)『韓国社会とジェンダー』、法政大学出版局
鄭萊基 (千奉祚訳) 2000a「韓国における『男性学』と『女性学』」『ジェンダー学を学ぶ人のた
めに』(日本ジェンダー学会編) 75-90頁、世界思想社
- * —— 2000b「男性運動に関する諸研究」『男性学と男性運動』(曹廷文他) 63-238頁、同門社
鄭大均 1995『韓国のイメージ』、中公新書
1998『日本(イルボン)のイメージ』、中公新書
コンネル, ロバート.W (森重雄他訳) 1993 (1987)『ジェンダーと権力 セクシュアリティの社
会学』、三交社
Connell, Robert W., 1995, *MASCULINITIES*, Polity Press
2000, *The Men and The Boys*, University of California Press
- 江原由美子・山田昌弘 2003『改訂新版 ジェンダーの社会学』、放送大学教育振興会
- * Franklin II, Clyde W. (鄭萊基訳) 1996 (1988)『男性学とは何か』、サムソン
フロイト, ジグムント (懸田克躬・吉村博次訳) 1969 (1953)「性欲論三篇」『フロイト著作集第
五巻』7-94頁、人文書院
古田博司・小倉紀蔵編 2002『韓国学のすべて』、新書館
ギルモア, デヴィッド 1994 (1990)『「男らしさ」の人類学』、春秋社
ハム, マギー (木本喜美子・高橋準監訳) 1999 (1995)『フェミニズム理論辞典』、明石書店
原ひろ子 1979『子どもの文化人類学』、晶文社
ヒラタ, ヘレーナ編 (志賀亮一他訳) 2002 (2000)『読む事典・女性学』、藤原書店
伊藤亜人編 1997a『もっと知りたい韓国【第2版】1』、弘文堂
1997b『もっと知りたい韓国【第2版】2』、弘文堂
——・大村益夫・梶村秀樹・武田幸男監修 1986『朝鮮を知る事典』、平凡社

- 伊藤公雄 1996『男性学入門』、作品社
2002「現代アメリカ合衆国における男性運動——プロミス・キーパーズを中心に」
『社会運動と文化』（野宮大志郎編）、ミネルヴァ書房
- * ——（鄭菜基訳）1997（1996）『男性学入門』、教育科学社
——・樹村みのり・國信潤子 2002『女性学・男性学』、有斐閣アルマ
- ユング, C.G（高橋義孝訳）1970『ユング著作集1 人間のタイプ』、日本教文社
- 片桐薫編 2001『グラムシ・セレクション』、平凡社
- 片山隆裕 1985「ジェンダーの相対性」『比較教育文化研究施設紀要』第36号 21-40頁
- 小林孝行編 2000『変貌する現代韓国社会』、世界思想社
- キューネ, トーマス編（星乃治彦訳）1997（1996）『男の歴史』、柏書房
- M. Kimmel, J. Hearn and R. W. Connell (eds.) 2004, *Handbook of Studies on Men and Masculinities*, Sage Publications
- ミレット, ケイト（藤枝濤子訳）1985（1970）『性の政治学』、ドメス出版
- 箕浦康子 1999『フィールドワークの技法と実際』、ミネルヴァ書房
- 中野卓・桜井厚編 1995『ライフヒストリーの社会学』、弘文堂
- 波平恵美子・青木恵理子 2002『文化人類学——カレッジ版 [第2版]』、医学書院
- 日本ジェンダー学会編 2000『ジェンダー学を学ぶ人のために』、世界思想社
- 野宮大志郎編 2002『社会運動と文化』、ミネルヴァ書房
- 岡田浩樹 2001『両班 変容する韓国社会の文化人類学的研究』、風響社
- 佐々木正徳 2003「韓国男性運動の展開」『国際教育文化研究』Vol.3 53-64頁
2004a「韓国の男性運動とそれを取り巻く環境について」『国際教育文化研究』vol.4
107-118頁
2004b「『韓国における男性性』研究の意義についての一考察」『九州教育学会研究
紀要』第31巻273-280頁
- 佐藤郁哉 1992『フィールドワーク』、新曜社
2002『フィールドワークの技法』、新曜社
- セジウィック, E.K 1999（1990）『クローゼットの認識論』、青土社
- 瀬地山角 1996『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』、勁草書房
- 嶋陸奥彦・朝倉敏夫編 1998『変貌する韓国社会』第一書房
- * ソンミョンヒ他 2000『フェミニスト、男性を語る』、青い思想
- 杉山晃一・桜井哲男編 1990『韓国社会の文化人類学』、弘文堂
- 多賀太 2001『男性のジェンダー形成 <男らしさ>の揺らぎのなかで』、東洋館出版社
- Taga, Futoshi, 2004, “East Asian Masculinities,” in M. Kimmel, J. Hearn and R. W. Connell (eds.), *Handbook of Studies on Men and Masculinities*, Sage Publications
- 竹村和子編 2003『メポストモフェミニズム』、作品社

佐々木 正 徳

谷富夫編 1996『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』、世界思想社

天童睦子 2001「ジェンダーとヘゲモニー支配」『文化伝達の社会学』（柴野昌山編）102-131頁、
世界思想社

* 女性韓国社会研究会編 1997『男性と韓国社会』、社会文化研究所

Trend and view of the masculinities research
– To agency from socialization –

Masanori SASAKI

The purpose of this paper is that I suggest a concept and analysis framework that is valid when doing an empirical research about “masculinities” in the men's movement organization. I was doing a fieldwork in the men's movement organization in Korea, so I wrote this paper to make the guideline of the research in the future.

This paper takes the following composition. In chapter I, the overview of this paper is described. In chapter II, I explain that the research about concept of masculinities changes. In the recent, the research about masculinities became an area with deep relation with the gender studies, but it had already occurred from before the feminism movements. In chapter II, I try to explain the change of concept of the masculinities to the present from the time when masculinities was remarkable in the field of the science. Then, in to survey the research trend of the men's studies in Korea, I point out some problems and feature of men's studies in Korea. Finally, I consider about the concept of masculinities that it is valid when we are an empirical research about masculinities.

In chapter III, I consider about the analysis framework that is valid when applying masculinities concept to fieldwork. I think that the men's movement organization in Korea has nature as the social movement organization. So, I pay attention to the way of cultural analysis of the social movement to become much utilized in the area of the social movement research. Then, I review about the effectivity of assuming that participant is an agency and to analyze a men's movement organization with the frame of the social movement as the culture in Korea. As the conclusion, I write down a view to the concrete research in the future in chapter IV.

This discussion was written as the guideline to proceed with the concrete research. I don't know that the frame, which was shown here, can amend how much in future. However, this paper is the indispensable work to do an empirical research that focus on masculinities in Korea.